



「Motor Development in the Different Types of Cerebral Palsy」

by Berta Bobath & Karel Bobath

脳性まひ児の診断あるいは治療の場において、正常児発達の知識がかなり参考になる。しかしながら単に正常発達の遅れという面だけでは、彼らの病像を特徴づけることはできない。また治療の進捗状況を正常児の発達段階に当てはめた場合、種々の矛盾をひきおこす。脳性まひ児は脳への損傷の程度や部位によって、ひとりひとり異なった中枢神経系障害を示し、その症状も年齢とともに変化してくる。ボバース夫妻は、30数年間に経験した数多くの脳性まひ児を、継続的に追跡した結果、次の様な結論に至った。即ち、神経発達の治療を受けずに自然に発達した脳性まひ児達は、本来の正常感覚運動発達を獲得できないばかりでなく、異常姿勢パターンや異常運動パターンのみを強めて代償的な発達を辿っている。つまり脳性まひ児は放置もしくは誤った取り扱いをすれば、悪化するものであると警告している。この考えに基づいて、ボバース体系では超早期治療、家庭療育、チ

ーム・ワークといった具体策が展開される。この本では脳性まひ児の各タイプ別の運動発達を、異常姿勢反射作用および異常運動パターンが出現してくる時期や、それらの変容例といった面から、具体的に説明している。内容は発達診断、正常児発達の段階と運動パターンの関連づけ、治療に応用すべく正常児運動パターン、原始パターンと異常パターンの相違、痙性の発達、痙直型両まひ児・片まひ児・痙直型四肢まひ児・アテトーゼ型四肢まひ児のタイプ別および第1期・第2期・第3期といった年齢の変遷などについて、代表的な写真を挿入しながら詳細に説明している。脳性まひ児の療育に関わる者だけでなく、中枢神経系の機構解明に興味を抱く研究家達にも是非とも一読してもらいたい本である。

(William Heinemann Medical Books, 128頁, 83図)

(聖母整肢園, 理学療法士 紀伊克昌)

「東京都心身障害者福祉センター研究報告集(7)」

(両上肢欠損の生活動作訓練特集)

本研究報告集は、4つの部分から成り立っている。即ち、第1部と第2部は両上肢欠損の生活動作訓練に関する研究、第3部は昭和50年度研究発表、第4部は委託研究論文抄録である。ここでは、我々OTに最も関連深い1部と2部について簡単に紹介させていただく。

第1部、両上肢欠損の訓練の動向はOTの古川氏が分担され、実に73に及ぶ内外の文献を中心に、先天性四肢欠損、奇型の分類、義手を使わない訓練、義手を使った訓練という観点から紹介と考察が行われている。末尾の文献リストを読みながら大変な労作であることに気づかされる。そして、最後に著者が、残存機能の訓練の重要性を再認識し、一方では義手の有効な場面をよく考えた上でのリハビリテーション訓練を行いたいと結んでおられる言葉に強い共感をおぼえる。

第2部、両上肢欠損の生活動作訓練の方法は、職能科の大瀧氏と松本氏(イラストレーション担当)によって書かれた大作である。即ち、両上肢欠損者が下肢を中心とし、残存機能を有効に使用して行う日常生活動作、学

校生活動作、成人後に出てくる動作(職業生活、家庭生活)に関する具体的な方法が分かりやすい文章と、素直でリアリティーがあり、且つ見る人を感傷的にさせない優れたイラストにより実に分かりやすく表現されている。しかし、動作の方法や内容は、比較的簡単なものから、ウルトラC級の高度の巧緻性を必要とするもの迄、実に様々である。この本を参考にして訓練を行う場合、下肢の動作能力の発達の場合、及びROM筋力、身体の柔軟性などを充分に考慮して行わないと患者に過度の努力を強いることになるであろう。又、下肢での動作を訓練する場合、下肢を使う意味について、セラピストも患者も深く考えるべきである。限られた紙面では、充分に内容の紹介はできないが、下肢を使って行う日常生活動作の方法について、これほど具体的に親切に書かれたものは他に存在しないだろう。セラピスト、患者、家族にとって貴重なヒントを与えてくれる参考書である。

(国立身体障害センター, 作業療法士 澤 治子)